



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | ゲイジ教授 （ミシガン大学） 大阪で講演                                                                |
| Author(s)    | 張, 知夫                                                                               |
| Citation     | 大阪公衆衛生. 1989, 56, p. 12-13                                                          |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/83678">https://hdl.handle.net/11094/83678</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 人 物 往 来

ゲイジ教授（ミシガン大学）

大阪で講演



「プライマリ・ヘルスケアの現場で、身体的健康のことばかりでなく、精神保健のことをもっと重視しなければならない」。…大阪公衆衛生協会の講演会で話をしたロイス・ゲイジ教授の考え方を要約すれば、こういうことになるだろう。

### 多彩な経歴

エチケットだから年齢はお尋ねしなかったが、イエール大学を出、訪問看護婦として就職したのが1949年とのこと。その後、ピッツバーグ、ニューヨーク、デトロイトの各地をへて現在はミシガン州アナーバーにある有名なミシガン大学。「もう、ここで終わるつもりよ」とおっしゃる。

勤務先は訪問看護協会から州衛生部、大学の社会福祉学部、看護学部と多彩。うらやましいのは、経歴のどの段階でも、現場の実践と教育と研究の3領域が、同時に進行していることだ。そしていま、ミシガン大学看護学

部で「地域精神保健看護」を担当、そのほかにWHOの看護教育に関する委員会のメンバーもつとめている。

「ゲイジ教授」と呼びかけるのが不似合いな優しいお人柄。しかしファーストネームで呼ぶのははばかりれる。そこで私たちは「ゲイジさん」に決めた。ご本人もこの呼称がいたくお気に召したようだった。

ゲイジさんは、ソウルで開催された国際看護大会に出席したあと、6月5日から17日まで大阪に滞在、その間に3カ所で講演をしたほか、国立大阪病院、吹田保健所、府立看護短大などを訪問し、京都と奈良の観光をこした。「何がいちばん印象的でした？」とよくと「奈良のシカです。ほんとにかわいい」とおっしゃった。

### プライマリケアにおける精神保健

いまゲイジさんが情熱をかたむけているのは「プライマリケアにおける精神保健」。この問題を看護婦・保健婦はもっと重視すべきだという。

「アメリカでは医療費抑制の必要から、入院を減らして予防、外来診療、在宅ケアなどのプライマリケアを重視する政策を取っています。しかしその内容は身体的健康のことばかり。医師も保健婦も、身体疾患のプライマリ診療に追われ、精神面のことを忘れていゝす。心と身体健康は、お互いに原因となり結果となっている。プライマリ段階においてこそ、心身を総合的に見るアプローチが大切なのです」。

その改善の具体策として

- ① 看護教育の中で精神保健をどう教えられるか
- ② プライマリケアの現場で、どうすれば患者（住民）の精神的問題を早期に発見できるか

がゲイジさんの研究テーマとなっている。

## 「体重や血圧を測るように…」

6月12日、大阪公衆衛生協会はゲイジさんを招き、日本精神科看護技術協会大阪支部との共催で講演会を開いた。その内容は上述の②にあたる。

ゲイジさんは、自分の調査研究にもとづいて明せきな話をしたが、そのなかで「ストレス測定の必要性」を強調したのが印象的だった。「健康診断にきた人たちに、体重や血圧の測定をするでしょう。それと同じように、簡単なストレス測定をします。質問紙法で、10分もあればできます。まず皆さんがやってみて下さい」

ここで紹介されたのが、英国の精神科医ゴールドバーグ博士作成の『精神健康調査票』というアンケートで、日本語版の用紙が200人の出席者全員に配られた。

「問題が解決できなくて困る」

「何かしようとしても手がつかない」

「最近、怒りっぽくなった」

といった質問が60項目。記入は「たびたびあった」「あった」「あまりなかった」「なかった」のどれかに○をつける。そのあと一定の尺度によって採点をし、10点以上は要注意、5～10点がボーダーライン、というように分けられる。

## 「意外とストレスが溜まってる…」

思いがけず共同作業に「参加」することになって出席者は大喜び。記入後、ゲイジさんの指示で自己採点をしてみて、「あれ、僕は意外とストレスが溜まってるんだな」「私は平静なのね」と、いろんな感想が会場に流れた。

血圧を測るのと同じように、こういう簡単な手法で患者の精神面に配慮をすることが極めて重要だと、ゲイジさんは力説した。

2日後の看護短大の講演会では前述①のテーマがとりあげられた。さらに2日後、西村教授（大阪大学精神科）の要請により阪大付属病院看護部で講演をした。話の中心は看護者のいわゆる「燃え尽き症候群」で、ゲイジさんと聴衆とのあいだに活発な討論が展開された。

協会からの感謝状に対して、帰国後、ゲイジさんから手紙がきた。

「講演でお話ししたことより、私自身が大阪で学んだことの方がずっと多かった。今後とも、よきパートナーになればと思っています」と結んであった。

## 協会も国際化？

外人講師による大阪公衆衛生協会主催の講演会は以前にもなかったわけではない。（たとえば梶原会長時代、英国の一般医スティーブン氏による「各国のプライマリ・メディカルケア」という講演会があった。）

今後こうした催しだけでなく、協同研究なども進めたいものだということが、先般の理事会でも話題になった。

協会も、いよいよ国際化の時代を迎えることになるだろうか。（そうなれば、雑誌「大阪公衆衛生」にも英文のアブストラクトが必要になってくる…？）

（張 知夫）